

何百年と続く職人たちの手法を 今に伝える左官職人の歩み

〈きたにや編集室〉 青森銀行記念館(国指定重要文化財、弘前市)の外観補修や紅花資料館(河北町)の黒漆喰仕上げなどを手掛け、何百年と継いできた手法を今に受け継ぎ甦らせてきた左官職人の伊藤富夫さんの作業場にお邪魔し、お話を伺いました。

職人の町「大石田」に生まれ、各地で左官技術を身につけた修業時代

―左官職人になったきっかけは？

伊藤 大石田町は、以前職人が一軒に一人は必ずいるといわれた土地です。同級生のうち、約八割が大工、左官を希望していました。それに私の父親が左官職人だったこともあり、中学を卒業すると長野市で左官業を営む従兄弟に弟子入りをするようになりました。

―どのような修業時代でしたか？

伊藤 最初の1、2年は朝にご飯炊きをした後、先輩達が起きる前に鑊の使い方を練習していました。いわゆる早朝練習ですね。その後、東京、横浜の現場で修業を重ねました。特に

横浜桜木町の富士銀行の現場では彫刻の上手な関西の職人がいて、その仕事ぶりを一生懸命に見て勉強したものです。そのときに覚えたことが、後に山形県旧県庁舎(文翔館)修復工事の際に役立ちました。

―その後、帰郷したそうですね。

伊藤 26歳で帰ってきて、山形市の左官会社に勤めました。その当時、左官職人だけで35人ぐらいいて、様々な現場を経験させてもらいました。5年ほど勤め、大石田町で伊藤左官店を創業し、現在に至ります。

建造物の表情を作り出す道具たち

―左官職人の代表的な道具といえば鑊ですが、何種類ほどお持ちですか？

伊藤 30種類はあります。よく使う「四半(しはん)鑊」や、細部に使う「鶴首鑊」、蛇腹などの留めさらい鑊、蔵づくりにかかせない「打切鑊(ツッキリ)」や「斜切鑊(シヤッキリ)」など様々です。同じ種類でも寸法が大小それぞれあるので、かなりの数になります。

巻頭特集

大石田舟運文化により栄えた職人の町、大石田。

左官職人の歴史と技に触れる

左官職人の名工がうまれた背景には、舟運の繁栄による江戸～明治、大正の蔵文化がありました。

取材 / 茂木勝之 デザイン / 星川忠平 撮影 / 奥山茂俊



用途によって使い分けられる、鑊の数々



作業場に飾られている鮮やかな椿の鑊絵

